

令和 5 年 6 月 20 日現在

機関番号：32507

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00108

研究課題名(和文) 啓蒙主義時代から19世紀前半までのフランスにおける建築図面・図表の思想的意義

研究課題名(英文) The Intellectual Significance of Architectural Drawings and Diagrams in France from the Enlightenment to the First Half of the Nineteenth Century

研究代表者

小澤 京子 (Ozawa, Kyoko)

和洋女子大学・人文学部・教授

研究者番号：40613881

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、テキストと並んで図解が世界の認識と思考のための道具となる啓蒙主義時代から、「タブロー」の語が科学技術分野での「図解」を意味するようになる19世紀前半(第二帝政期以前)までのフランスを対象に、建築分野における図面や図表表現に着目し、世界を把握・解釈・分類し(再)構築・(再)創造するための思考行為の媒体・手段として捉えた上で、その思想上の意義を明らかにした。さらに、この特徴的な時代における知と認識の枠組の特徴と変遷を、自然科学史や認識論とも架橋しつつ、建築の図表的表現において明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の意義は、ドイツを中心に現在盛んな「像行為(Bildakt)」の方法論を援用しつつ、この方法論では未だ十分に扱われていない啓蒙主義時代から19世紀前半までの建築図面を分析することで、自然科学や科学技術の図表的表現と思考の関係とを比較し、共通点(=この時代固有の認識の態様)と差異(=この時代における建築固有の問題)を明らかにした点にある。

研究成果の概要(英文)：In this study, I focused on architectural drawings and diagrams from the Age of Enlightenment to the first half of the 19th century in France, in other words, from the period when diagrams became a tool for recognizing and thinking about the world as well as texts, to the period when the word "tableau" came to mean "diagram" in the field of science and technology. Characterizing architectural drawings and diagrams as a medium of grasping, interpreting, classifying, (re)constructing, and (re)creating the world, I placed their significance in the context of the history of thought. Furthermore, I elucidated the characteristics and changes in the frameworks of knowledge and cognition before and after the Enlightenment, in the diagrammatic representation of architecture, while bridging the history of science and epistemology.

研究分野：思想史、表象文化論

キーワード：建築の図表的表現 建築史 建築思想 建築理論 類型学 像行為 テキストとイメージ 19世紀建築

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

近年の美術史、視覚文化研究や「イメージ分析」の分野では、図的表現が人間の思考にもたらす創造的・解釈的な機能への関心が高まっている(とりわけブレードカンブラを中心にドイツで盛んな像行為(Bildakt)論)。そこで特に注目されているのは、自然科学と美術史の両分野において、図像や図表、図解が人間の認識と創造的解釈に資する機能である。なかでも、本研究が着目する複数の事物を同一平面上に並べて配置する図的表現は、科学技術分野において初期近代に登場したものであり、19世紀には従来絵画を指す語だった「タブロー」が、この種の図表をも示すようになる。ブレードカンブラはこの図表(タブロー)に、ただ事物や要素を並置するだけでなく、それらの間に一定の秩序をもたらすという意義を見出している(Bredenkamp et al., *The Technical Image*, 2015)。

啓蒙主義時代の図的表現については、J.プルーストを筆頭に、『百科全書』図版とそこに体現された思想の詳細な研究の系譜がある。また、啓蒙主義期の様々なイメージを医療・自然分野と芸術分野を越境しつつ論じた研究も、B.M.スタフォード『ボディ・クリティシズム』(1991年)を嚆矢とし、以降活発である。そこでは、この時代の図的表現における、不可視のものが可視化される際の認識のあり方や技術的な基盤、さらにはイメージとテキストと思想との相互関係が分析対象となっている。

また、思想史・科学史と視覚的表象の双方を対象とした哲学的アプローチとしては、図表(タブロー)を17~18世紀のエピステーメ(各時代の知の基盤)の体現とみなすフーコーの立場が、今日にいたるまで重要な参照項となっている(『言葉と物』1966年)。

建築図面も自然科学、医学、科学技術分野における図版・図表も、単に文字情報を分かりやすく翻訳した「説明(illustration)」ではなく、そこでは「読解」のための知識や技術、経験が問われている。これらの図版はいわばイメージと文字の性質を併せ持ち、人々を読解へと誘う。つまり図の意味内容は決して一見明白なものではなく、そこではイメージの読解行為が問題となっている。さらに、図は思考の体現物であるに留まらず、描くことを通して、また図の創造的読解を通して思考するための媒体や手段でもある。

申請者はこれまでの研究において、啓蒙主義時代の自然科学における言説と建築・都市構想に体現された思想との共通点を明らかにしてきた。当時の建築理論と自然科学をつなぐのが「性格/特徴(カラクター)」という語であり、これは「目に見える外観上の特徴」と、より内在的な機能や抽象的な分類とを結びつける概念である。またこの概念は、事物の外観の「可読性」を基に体系化と分類を試みる発想に支えられており、これは同時代の事典編纂や普遍言語探求の思潮とも共通している。

研究代表者は、これまで研究課題として「啓蒙主義時代・新古典主義時代・フランス革命期の建築思想と、同時代の自然科学や身体にまつわる医学的言説との相互関係」の解明と考察に取り組んできた。これらの研究を通じて得られた発見と着想を踏まえ、建築における「類型学」とその図的表現に焦点を絞ることで、その思想史的な諸条件を解明するとともに、その創造的な側面を像行為理論などの近年着目されている方法論を用いて分析する、本研究の構想に至った。

以上の学術的背景から導き出されたのが、啓蒙主義時代から19世紀前半に至る時代のフランスを対象とし、建築図面を創造的思考の媒体・手段ととらえた上で、そこにおける「類型学」と「イメージを読むこと」の思想史的意義を検討するという、本研究の根幹をなす学術的問いである。

2. 研究の目的

本研究では、「啓蒙主義時代から19世紀前半に至る時代のフランスを中心とする建築図面における、「類型学」と「イメージを読むこと」の思想史的意義の解明」を目指した。研究の対象としては、18世紀半ばから19世のフランスにおける建築理論、具体的な固有名としてはJ.F. ブロンデル、プレ、ルドゥ、カトルメール・ド・カンシー、J.-N.-L. デュランらの言説と図面を中心的に扱った。具体的には、次の2つのサブテーマの解明を目的とした。

テーマ1 建築の類型学と図的表現：自然科学における類型学(タイポロジー)および分類学(タクソノミー)、系統学(ジェネオロジー)の思考や図的表現と、建築における類型学の思想・図版との比較により、共通点と差異を解明する。

テーマ2 思考手段・媒体としてのイメージ：イメージとその配列による図解・図表においては、

次の二つの行為が相互的・相補的に行われる。一方では、世界の認識や解釈、再構成、再創造が、イメージ・図解・図表に体现・反映され、他方では、イメージや図解・図表を用いた思考によって、世界が認識・解釈・(再)構成される。そこでは、イメージどうしの並置・並列と「比較」という思考様式が採用されることとなる。このような前提に基づき、イメージ間の関係やイメージとテキストの関係に注目し、記述と解釈のなされ方や、図表(タブロー)で図版同士の配列が生成させる意味を明らかにする。

3. 研究の方法

上掲2つのテーマにつき、一次資料(テキストおよび図版)のアーカイブズ調査と、二次文献(都市・建築史、社会思想史、文学史、科学史関連)の批判・検討を並行して実施した。本研究課題の遂行中に COVID-19 の世界的なパンデミックが発生したため、当初計画していた国外アーカイブズのうち、調査を実行できたのはフランス国立図書館(BnF)と、パリ第5大学(旧パリ外科医学校)のみとなった。その分の費用とエフォートは、国内でも可能なオンライン公開済み資料を中心とする調査、および二次文献(先行研究)の博覧と批判的検討に振り分けて研究を進めた。最後に、本研究全体を総合するために、得られた個別の研究成果に立脚しながら、対象とする時代の建築の図的表現が立脚する認識枠組の解明と、その思想史的背景の考察を行った。

4. 研究成果

(1) 研究の主な成果

本研究で得られた主な研究成果として、下記の3点が挙げられる。

ヒューリスティック(発見法)的な実践としての「建築の図面(イメージ)」の制作と使用

2018~19年度は、テーマ1に主軸を置き、特にカトルメールとデュランの建築論と図版について、先行研究も批判的に踏まえつつ、新たな分析を行った。また、2019年度にはフランス国立図書館等にてアーカイブズ調査も実施した。そこから得られた成果が、口頭発表「世界解釈、世界構築としての建築の図的表現：J.-N.-L.デュラン『比較建築図集』を中心に」2018年、「建築史の視覚的記述：その支持体と配置、そして解体」2019年、「建築における「性格(キャラクター)」概念と不可解なもの：18世紀フランスの建築論から」2019年、および論文「世界解釈、世界構築としての建築の図的表現：J.-N.-L.デュランの『比較建築図集』と『建築講義要録』から」(『和洋女子大学紀要』、2019年)である。

イメージとテキストの協働・相互関係がもたらす仮構的空間性と、見ること・読むことがもたらす想像的・仮想的な身体運動

2020~22年度には、より広い視座から、建築図面・図表の「創造的解釈行為」としての側面を分析した。その成果として、口頭発表「歩行によって風景を拓く：ディドロを中心とする18世紀のテキストから」2020年、「フーリエの建築構想」2022年、および「フランス革命期における偉人と墓」(『立教大学フランス文学』2020年)、「絵のなかを歩くディドロ：「サロン評」の風景画記述と「歩行」のテーマ系」(『和洋女子大学紀要』2021年)を公表した。

さまざまな時代における建築・都市の「イメージ(表象、言説)」の分析への応用

上掲の研究成果と並行しつつ、研究課題の考察によって得られた思考の方法論を応用し、建築・都市のイメージの変遷や「引用、翻案」関係につき、より広い時代のスパンで作品分析を行なった。その成果が、論文「デミウルゴスの輪郭線を掴む：磯崎新をクロード=ニコラ・ルドゥーを通して覗く」(『現代思想』2020年)、「架空都市の地図を描く：地図と(しての)テキスト」(『ユリイカ』2020年)、「1980年代の日本のサブカルチャーに現れた「廃墟」や「遺棄された場所」のイメージ」(『和洋女子大学紀要』2020年)、「それから文学と批評の同人誌『同時代』に寄稿した一連の論考「書物への自己幽閉」(2021年)、「地図喪失の旅」(2020年)、「ふたつの内なる異境:夜を歩くことと遺棄された場所」(2020年)である。

上掲①~③の研究成果の集大成として、最終年度の2022年度には、啓蒙主義時代から19世紀前半までを中心とする建築図面・図表とその言説における、「イメージを読む/イメージによって思考する」行為を、思想史の文脈に位置づける作業を行った。この内容は単著にまとめ、2024年春に刊行予定である。

また、以上の研究課題に付随して、「身体」のイメージ分析、表象と身体の関係という観点を派生的に発展させた研究も実施した。その一連の成果は、上掲の単著とは別の企画として、近年中の刊行を目指し出版社と交渉中である。

2020~22年度にはCOVID-19パンデミックが勃発したため、本研究課題は当初の予定より2年間期間を延長している。

(2) 得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

本研究で得られた成果の位置づけと意義は、啓蒙主義時代から19世紀前半までの建築図面・図表による「イメージを読む/イメージによって思考する」行為を、思想史の文脈での位置づけを明確にした点にある。

先行研究においては、自然史、医学や科学技術分野の図像は、1990年代(典型的にはB.M.スタフォード)以降、今日の像行為論に至るまで、分析の対象として盛んに取り上げられてきた。建築の図的表現についても、1960年代以降は「紙上建築」や「アンビルト」の系譜が注目されるようになり、とりわけ2000年代以降は2次元における建築の図的表現それ自体に、3次元空間に実現された建築物とは異なる可能性を見出そうとする研究が盛んである。また、19世紀のカトルメール・ド・カンシーから20世紀のアルド・ロッシにいたる建築の分類学(タイポロジー)については、J.C.アルガンや大島哲蔵らの建築史研究がある。しかし、「イメージによる創造的思考」という観点からの建築図面の検討は、現状ではドイツの図像学の学術誌『PLANBILDER』のようなごく少数の事例研究が存在するのみで、肝心の図面・図表が認識や思考と緊密な相互関係を結ぶようになる啓蒙主義時代を対象にするには至っていなかった。

そこで本研究では、ドイツを中心に現在盛んな「像行為(Bildakt)」の理論も参照しつつ、この方法論では未だ十分に扱われていない啓蒙主義時代から19世紀前半までの建築図面を分析することで、自然科学や科学技術の図的表現と思考の関係とを比較し、共通点(=この時代固有の認識の態様)と差異(=この時代における建築固有の問題)の一端を明らかにした。

また、フーコーが『言葉と物』で前提としていたリンネによる分類学(タクソノミー)、つまり共通性と差異、上位カテゴリと下位カテゴリ(綱・目・属・種)による分類に加えて、同時代の建築理論とその図的表現(並置図・図表)で問われていた、類型学(タイポロジー)に着目することで、フーコーによる認識論の枠組自体を、批判的に再検討することにも努めた。

さらに俯瞰するならば、本研究の成果は、美術史と科学技術史に分断されてきた建築図面と土木工学分野、エンジニアリング分野の図版を等価なイメージ資料として扱い、従来は思想史の分野で研究されてきた認識・思考の歴史と、建築史の一資料と見なされてきた建築図面・図表とを、一つの問いとテーマにおいて架橋するものでもある。

(3) 今後の展望

本研究で得られた上述の成果と、新たに浮かび上がってきた問いに基づき、2022年度からは研究課題「18世紀から19世紀前半における「空間内を歩行する身体」の思想史的意義の研究」(科研費基盤C22K00108)に取り組んでいる。この問いは、「啓蒙主義時代、新古典主義時代、フランス革命期の都市や建築の空間をめぐる思想と、同時代の自然科学や身体にまつわる生理学・医学的言説との相互関係」を明らかにし、空間表象、身体、ナラティヴ(テキストにおける語り)という3項の相互関係について、理解と考察を深化させ、また研究成果について他の研究者たちと対話を交わすなかで、啓蒙主義の思想家・文筆家(ディドロ、ルソー、メルシエ、レティフら)による「歩行と(いう)ナラティヴ」が、リベルタンの、ないしは革命的な性質を潜在させていることを発見したことから着想に至ったものである。この発展的な研究課題には、革命期を挟む18世紀から19世紀前半までの、主としてフランスにおける言説と表象を対象に、身体を伴った空間内の経験としての「歩行」が有する諸契機の思想史的な位置づけを明確にし、その意義を解明するという意義がある。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計21件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 小澤京子	4. 巻 141
2. 論文標題 活人画と映像のあいだ その困難さをめぐって	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 明治大学文芸研究	6. 最初と最後の頁 87-100
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小澤京子	4. 巻 2
2. 論文標題 鎮静剤としての / 幻覚としての / 毒物としての装飾	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 poison rouge 2：現代社会における 毒 の重要性 2019（吉岡洋編、京都大学こころの未来研究センター発行）	6. 最初と最後の頁 77-95
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小澤京子	4. 巻 3
2. 論文標題 廃墟化する身体、廃墟としての身体	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 poison rouge 3：現代社会における 毒 の重要性 2020（吉岡洋編、京都大学こころの未来研究センター発行）	6. 最初と最後の頁 93-112
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小澤京子	4. 巻 53-8(776)
2. 論文標題 フィルムのなかのチャンネル	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ユリイカ	6. 最初と最後の頁 194-207
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小澤京子	4. 巻 4
2. 論文標題 白塗りと死化粧	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 poison rouge 4: 現代社会における 毒 の重要性 2021 (吉岡洋編、京都大学こころの未来研究センター発行)	6. 最初と最後の頁 93-111
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小澤京子	4. 巻 54-12(795)
2. 論文標題 書かれなかった歴史を描きなおす: セリーヌ・シアマ『燃ゆる女の肖像』	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ユリイカ	6. 最初と最後の頁 103-113
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小澤京子	4. 巻 55-3(800)
2. 論文標題 皮剥ぎとしての描画、あるいは見ることの劫苦 (アゴニー)	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 ユリイカ	6. 最初と最後の頁 170-176
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小澤 京子	4. 巻 9
2. 論文標題 エッセイ「小さな部屋のポエティーク」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ねむらない樹	6. 最初と最後の頁 124~126
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小澤 京子	4. 巻 77(9)
2. 論文標題 随筆「小さな部屋についての思索」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 群像	6. 最初と最後の頁 296-296
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小澤京子	4. 巻 62
2. 論文標題 絵のなかを歩くディドロ：「サロン評」の風景画記述と「歩行」のテーマ系	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 和洋女子大学紀要	6. 最初と最後の頁 13-24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.18909/00001974	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 小澤京子	4. 巻 52-7(759)
2. 論文標題 架空都市の地図を描く：地図と(しての)テキスト	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ユリイカ	6. 最初と最後の頁 183-195
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小澤京子	4. 巻 第4期第3号
2. 論文標題 書物への自己幽閉	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 同時代	6. 最初と最後の頁 22-27
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小澤京子, 栗原亨, 星野藍, 三井嶺	4. 巻 1313
2. 論文標題 座談会 廃墟はなぜ人を惹きつけるのか	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 建築ジャーナル	6. 最初と最後の頁 2-7
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小澤京子	4. 巻 第4期第2号
2. 論文標題 地図喪失の旅	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 同時代	6. 最初と最後の頁 29-34
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小澤京子	4. 巻 49
2. 論文標題 フランス革命期における偉人と墓	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 立教大学フランス文学	6. 最初と最後の頁 99 - 129
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小澤京子	4. 巻 48(3)
2. 論文標題 デミウルゴスの輪郭線を掴む：磯崎新をクロード＝ニコラ・ルドゥーを通して覗く	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 178 - 191
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小澤京子	4. 巻 61
2. 論文標題 1980年代の日本のサブカルチャーに現れた「廃墟」や「遺棄された場所」のイメージ	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 和洋女子大学紀要	6. 最初と最後の頁 35 - 48
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.18909/00001938	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 小澤京子	4. 巻 1
2. 論文標題 ふたつの内なる異境：夜を歩くことと遺棄された場所	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 同時代 第4次	6. 最初と最後の頁 134 - 141
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小澤京子	4. 巻 60
2. 論文標題 世界解釈、世界構築としての建築の図的表現：J. -N. -L. デュランの『比較建築図集』と『建築講義要録』から	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 和洋女子大学紀要	6. 最初と最後の頁 1-11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.18909/00001907	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 小澤京子	4. 巻 0
2. 論文標題 絵画の物質性について：絵具、毒、薬、白粉、そして血と汚穢	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 poison rouge : 現代社会における 毒 の重要性 2018 (吉岡洋編、京都大学こころの未来研究センター発行)	6. 最初と最後の頁 66-81
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小澤京子	4. 巻 30(6)
2. 論文標題 フィクションにおけるテクノロジーの表象とジェンダー	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 知能と情報(日本知能情報ファジィ学会誌)	6. 最初と最後の頁 308-316
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

[学会発表] 計12件(うち招待講演 7件/うち国際学会 2件)

1. 発表者名 小澤京子
2. 発表標題 フリーエの建築構想
3. 学会等名 シャルル・フリーエ研究会(主催:福島知己)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小澤京子
2. 発表標題 19世紀の薬物と装飾イメージの両義性
3. 学会等名 京都大学こころの未来研究センターシンポジウム「ファルマコン:生命のダイアログ」(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小澤京子
2. 発表標題 ジャンク化する身体:1980年代の表現を中心に
3. 学会等名 現代社会における<毒>の重要性 2020年度シンポジウム(招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 小澤京子
2. 発表標題 白塗りと死化粧
3. 学会等名 京都大学こころの未来研究センター「現代社会における 毒 の重要性」2021年度研究報告会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小澤 京子
2. 発表標題 フリーエの建築構想
3. 学会等名 シャルル・フリーエ研究会（主催：福島知己）（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小澤京子
2. 発表標題 歩行によって風景を拓く：デイドロを中心とする18世紀のテキストから
3. 学会等名 シンポジウム「テキストを建てる、イメージを歩く」
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 小澤京子
2. 発表標題 建築における「性格（キャラクター）」概念と不可解なもの：18世紀フランスの建築論から
3. 学会等名 フンボルト・コレーク東京2019（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小澤京子
2. 発表標題 建築史の視覚的記述：その支持体と配置、そして解体
3. 学会等名 表象文化論学会第14回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小澤京子
2. 発表標題 Architectural Image as a Means of Classification, Heuristics and Design: From J.-N.-L. Durand's Recueil et parallele des edifices de tout genre and Precis des lecons d'architecture.
3. 学会等名 第21回国際美学会（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小澤京子
2. 発表標題 世界解釈、世界構築としての建築の図的表現：J. -N. -L.デュラン『比較建築図集』を中心に
3. 学会等名 表象文化論学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小澤京子
2. 発表標題 フランス革命期における偉人とモニュメント：死者の記憶と建築空間
3. 学会等名 公開シンポジウム「セレブリティの呪縛：18～20世紀フランスにおける著名作家たちの肖像」（立教大学文学部主催）（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小澤京子
2. 発表標題 絵画の毒：絵の具の物質性について
3. 学会等名 京都大学こころの未来研究センター公開講座「芸術と 毒」（招待講演）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 蘆田裕史， 藤嶋陽子， 宮脇千絵編， 赤阪辰太郎、朝倉三枝、有國明弘、五十棲巨、小澤京子、落合雪野、香室結美、川崎和也、菊田琢也、北村匡平、高馬京子、西條玲奈、鈴木彩希、関根麻里恵、高橋香苗、田中里尚、田本はる菜ほか著	4. 発行年 2022年
2. 出版社 フィルムアート社	5. 総ページ数 292
3. 書名 クリティカル・ワード ファッションスタディーズ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------